

ため池の有効活用の提案

ー兵庫県明石市を対象としてー

梅田 朋佳

【修士論文概要書】

1 章 はじめに

都市における水空間は都市に様々なメリットを与えている。都市における水空間は、水空間の空間的側面によりもたされる機能と水空間の空間的側面と水の特質の両者によってもたされる機能がある。前者の例として、レクリエーション、避暑、文化の形成、居住空間、歴史的遺産、防災、熱資源、オープンスペースの形成が挙げられる。後者の例として、飲料、送流力、生物活動が挙げられる。

兵庫県は約3万8千箇所のため池を保有しており、全国一の保有県である。特に東播磨地方に多く分布しており、その中の107個のため池が明石市に存在している。ため池が作られ使われていた当初は、子供の遊び場や稲作の祭事場、食料を採る場、皿を洗う場所など年齢も使用目的も様々な住民によって、多様な機能をもつ場所として使われてきた。現在もため池から農業用水を引き、農業を行っている地域もあるが、ため池からではなく地下水をひいて農業用水として使用している地域が増えている。そのため、ため池の水が使われることがなくなることで、管理が行き届いていなかったり、水が循環されていなかったりするため池が増えている。その結果、アオコの発生や不法投機が起こる等の問題が顕在している。また、現在、農業用水として使用されているため池の周辺部でも、農家の高齢化が起きている。農業就業人口を年齢別で見ると、75%以上が60歳以上である。そのため、今後の明石市でも高齢化が進み農業が衰退していき、ため池の維持が難しくなると予想される。このような背景から、本研究ではため池の新たな利用方法を展開することを目的とする。

2 章 目的・研究方法

現在の明石市にあるため池の周囲の環境違いによってグループをつくり色分けしマッピングした。地図にマッピングしたものが図1である。ため池の周辺環境の分け方として、住宅、学校、田、山、その他の5つに分け、それぞれピンク、青、黄、緑、オレンジの色

をつけた。本研究では上で分類分けをした住宅、学校、田、山、それぞれのグループでため池を選定した。それぞれの敷地を表したものが以下の図 2-4 である。住居と田、学校、山である。また、今回の提案はそれぞれ選定したため池の上を歩行できるようにメッシュのエクスパンドメタルでできた建築をつくる。この建築は、ため池の水位の変化によって、水に浸る部分と浸らない部分が変わり、空間が時間によって変化していく。全ての敷地に共通する変化をそれぞれ四季、天気、光、風と表し、基本的要因とする。一方、敷地個別の変化を場所的要因とした。これらを使って、それぞれの敷地にあった建築を提案していく。

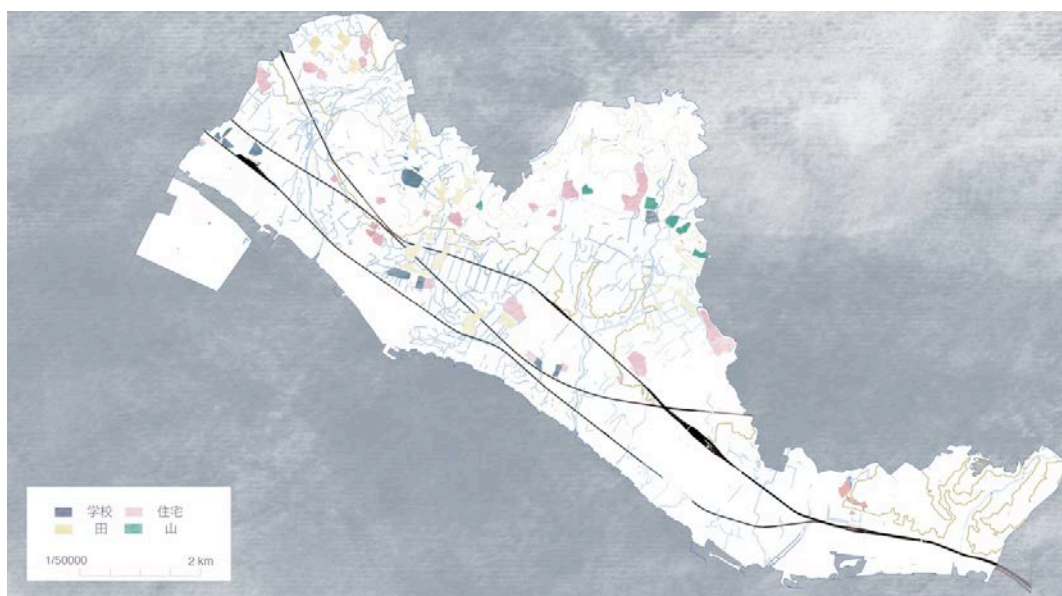


図 1 グループ分けため池地図

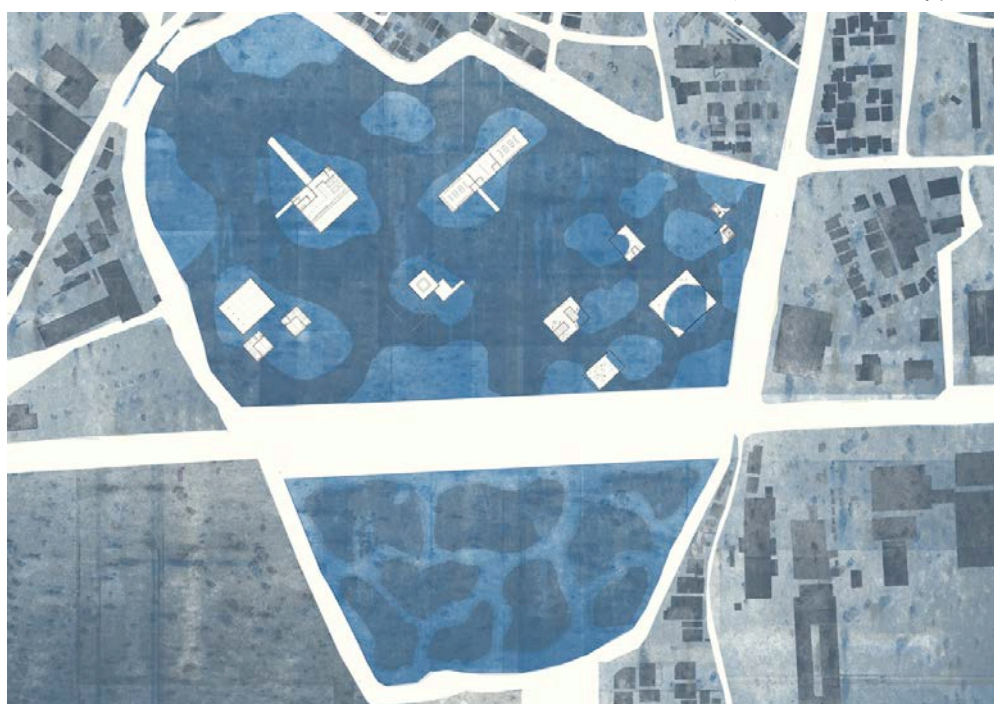


図 2 住居・田敷地図



图 3 学校敷地图



图 4 山敷地图

3 章 結果

本研究において、既存ため池における空間再編成の視点から、新たなため池再生モデルを提案した。現在、日本ではため池再利用において、ため池は埋め立てられ転用される方式が行われている。未だ、既存ため池を残したまま、新たな土地活用をする計画は行われていない。現在、農家減少及び農家の高齢化によって、ため池の保全管理が難しくなっていることが認識されている今日において、新たにため池のコミュニティを作り、新たな方法で保全管理する方法が必要であると考え。今回の提案は、ため池の空間に地域住民が生活の一部を過ごす空間を取り入れ、ため池を街の共有物にすることで、今までため池と関わりを持たなかった地域住民とため池管理者との新たなコミュニティを創出し、地域住民と管理者が共に管理する新たな保全管理方法が生まれるであろう。

台湾の産業は、政府の産業政策のもとで情報革命とグローバル化を進展させ、他国の経済と相互依存関係を深めてきた。その国際競争力は、2004年の世界経済フォーラムのランキングで4位、IMDの世界競争力ランキングでも11位と高い水準を保っている。しかし、台湾(中華民国)は、1971年に国連を脱退して以来、世界の主要国と断交し、国連機関にも参加せず、国際制度上は孤立を続けている。本稿においては、台湾が、クロスボーダー・ガバナンスの一般論に見られるような国際協調のメカニズムへのアクセスに制限を受けざるを得なかったにもかかわらず、その活動が国際的な協調の枠組みに沿ったものであるのは、台湾独自のクロスボーダー・ガバナンスのメカニズムが働いてきたからであると考え。すなわち、兩岸経済の統合過程においては、他国にみられるような地域間の協定や政府間協議などに代わるものとして、民間の力が協調メカニズムの作用をしていることを、国際レジームレベルにおいては、経済的・政治的な誘因が台湾を見えざるグローバル・ネットワークに導いてきたことを明らかにする。